

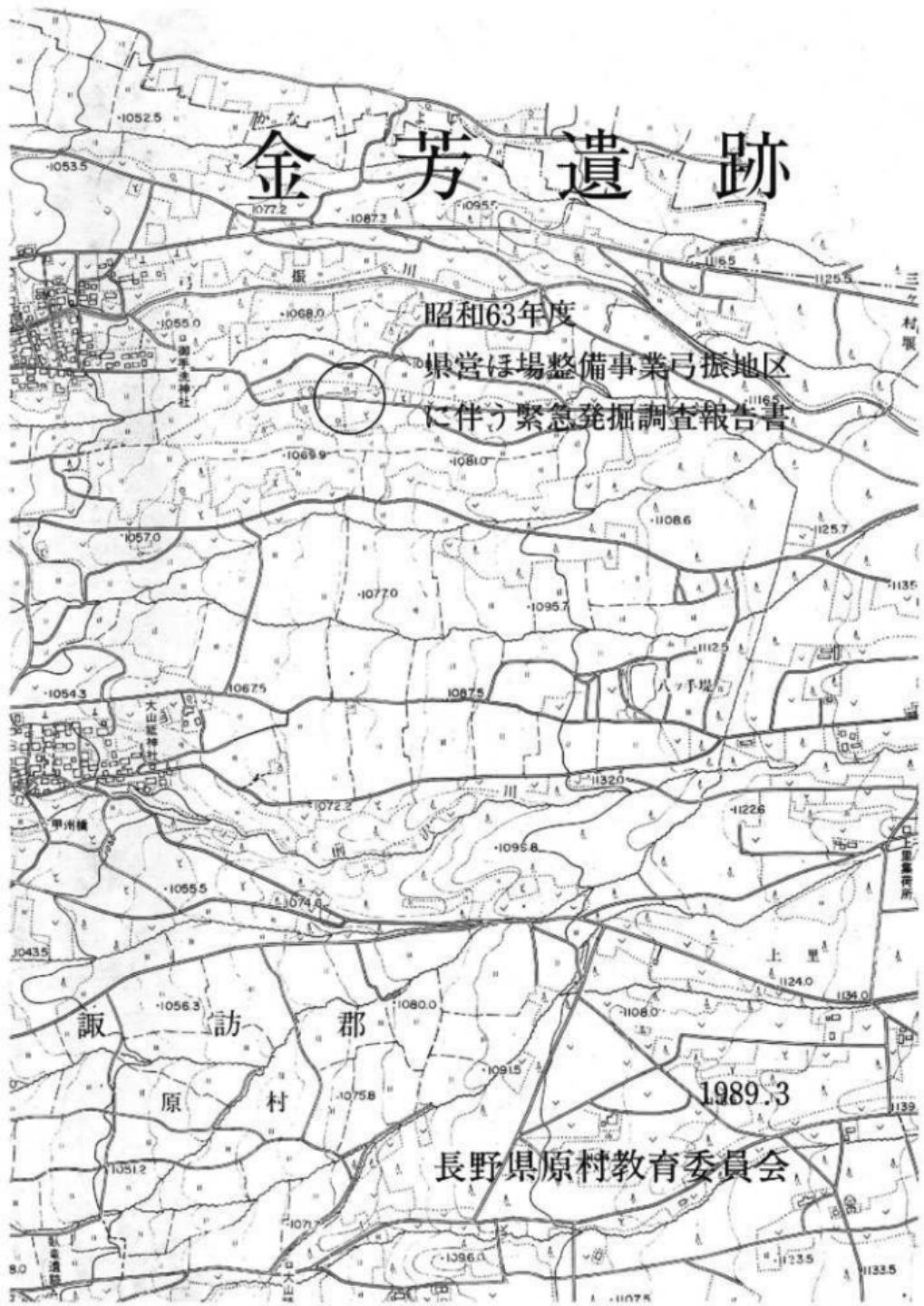
金芳遺跡

昭和63年度

県営ほ場整備事業弓張地区
に伴う緊急発掘調査報告書

1989.3

長野県原村教育委員会



表紙地図10,000分の1 ○印が金芳遺跡

序

八ヶ岳の裾野に広がる高原の村、原村では農業の合理化と生産性の向上を目指して、昭和55年度から「県営圃場整備事業弓振地区」が行われています。一方で、八ヶ岳西麓に広がるこの台地上には、遺跡の宝庫とも言われるほど数多くの遺跡が存在しています。そのようななかで、この「金芳遺跡」は、基盤整備工事に先立つ遺跡分布調査の結果確認されました。

そこで、遺跡の保存について関係各部局による話し合いが持たれ、遺跡を記録保存していくという方向で、発掘調査が行われました。

調査の結果、平安時代の住居址が発見され、鐵治を行っていたと思われるふいごの破片や鉄滓などの数多くの遺物が発見され、貴重な研究資料を得ることができました。

なお、この発掘調査に際し、諏訪地方事務所土地改良課の方々の御配意をはじめとして、長野県教育委員会の御指導、そして地元の県営圃場整備事業弓振地区実行委員会の皆様、地権者の方々など関係者各位の御好意、御尽力に深く謝意を表する次第であります。

平成元年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例　　言

1. 本報告は「県営ほ場整備事業弓張地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柳沢に所在する金芳遺跡の緊急発掘調査報告書である。
発掘調査は、前沢遺跡で実施したが、その後、小字名である「金芳」を冠した金芳遺跡と呼称した。
2. 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託をうけた原村教育委員会が、昭和63年8月23日から9月9日にかけて実施した。整理作業は、昭和63年9月12日から平成元年2月20日まで行った。
3. 現場における遺構実測は平林とし美、記録は平出一治・伊藤証・平林、写真撮影は平出、土器と石器の実測・拓本・トレースは平林、執筆は平出・伊藤・平林が話合いのもとに行なった。
4. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、7の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事太田喜幸・小林秀夫・戸部公一・百瀬長秀、井戸尻考古館館長武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　　次

序　　例　　言　　目　　次

I	発掘調査に至る経過	1
II	発掘調査の経過	1
III	遺跡の位置と環境	2
IV	遺　　跡　　の　名　称	4
V	グリッドの設定の調査方法	4
VI	土　　屑	6
VII	発見した遺構と遺物	6
1	平安時代の遺構と遺物	2
(1)	第1号住居址	(1) 土　　器
(2)	遺構外出土の遺物	(2) 石　　器
VIII	ま　　と　　め	12
註と参考文献	発掘調査団名簿	

I 発掘調査に至る経過

昭和55年度から実施されている「県営は場整備事業弓張地区」も9年目をむかえ、昭和63年度の工事予定地域内に前沢遺跡（原村遺跡番号7）が所在していることから、その保護について、昭和62年9月10日に行われた長野県教育委員会の「昭和63年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財の保護協議」において協議された。

本遺跡が発見されたのは、昭和46年度に長野県教育委員会で実施した農業振興地域開発地域埋蔵文化財緊急分布調査の折で、その報告書には、柳沢前尾根遺跡と呼称し「弓張川南方で柳沢部落よりも東へのぼった丘陵上に位置している。縄文時代の甕が出土したといわれている。中期後半の埋甕と思われ、住居址の存在が推察される。」と、記載され、分布図をみるとほぼ尾根全城が遺跡となっている。やはり長野県教育委員会が昭和54年度に実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査でも、縄文時代中期後半の曾利式土器破片を僅かに採集している。しかし、発見した資料は少なく、遺跡の範囲を明確にできない状態で、当地方の遺跡立地を考慮するなかで遺物採集地点を中心にして50m位の範囲を遺跡と考えている。

このように遺跡の性格および範囲等については不明瞭な点が多く、適切な結論を導きだすことができなかったことから、表面採集を行い遺跡の範囲を明確にすることが急務とされた。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者であった。

その後も、原村役場農林課と協議を進め、地元に対する説明も行い、表面採集は12月23・24日に実施したが、やはり明確な範囲を把握することはできなかった。

発掘調査は、原村教育委員会が諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、農家負担分については村費をあて、昭和63年8月23日から9月9日にわたり実施した。

II 発掘調査の経過

昭和63年8月23日 発掘調査の準備をはじめる。

8月24日 発掘機材・テントの搬入。

8月25日 テントの設営。調査区の草刈をした後にグリッド設定を行う。

8月26日 50ラインからグリッド発掘調査をはじめる。ローム層まで擾乱が達しているグリッドもある。

BQ-42・BQ-46・BK-50・BA-55・BF-55グリッドで縄文土器破

- 片と土師器の破片が出土する。
- 8月29日 BQ-46・BS-46グリッドで住居址の落ち込みをみとめる。
第1号住居址と呼び検出作業を行う。
- 8月30日 昨日に引き続き住居址の検出作業を行う。グリッドによっては擾乱がローム層まで達している。
- 9月1日 平面隅丸方形を呈する平安時代の竪穴住居址を検出し、東西方向に土層観察のベルトを残し、住居址の精査をはじめる。土師器と灰陶陶器の破片、ふいごの羽口、鉄滓、磨製石鎌を発見する。
- 9月2日 昨日に引き続き住居址の精査を行う。埋土の観察と実測を行う。
- 9月3日 引き続き住居址の精査を行う。床面は凹凸が著しい。
- 9月7日 住居址の精査と写真撮影を行う。グリッドの杭を抜き片付けをはじめる。
- 9月8日 グリッドの杭を抜き、機材の撤去、片付けを行う。住居址の実測を行う。
- 9月9日 カマドに使用されていた石、発掘機材の撤去を行う。

III 遺跡の位置と環境

金芳遺跡（原村遺跡番号7）は、長野県諏訪郡原村1802番地付近に位置する。このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、大小様々な尾根の発達がみられる。それらの尾根上には表1および第2図に示したように、縄文時代を中心とした数多い遺跡が埋蔵されている。本遺跡もその一つで、柳沢区の東外れにあり、JR中央本線茅野駅の東方約7.5kmの弓張左岸のやせ尾根上に立地している。標高は1080m前後を計り、当地方における遺跡としてはやや高所に位置している。なお、原村における遺跡高度限界は標高1200m前後のラインである。

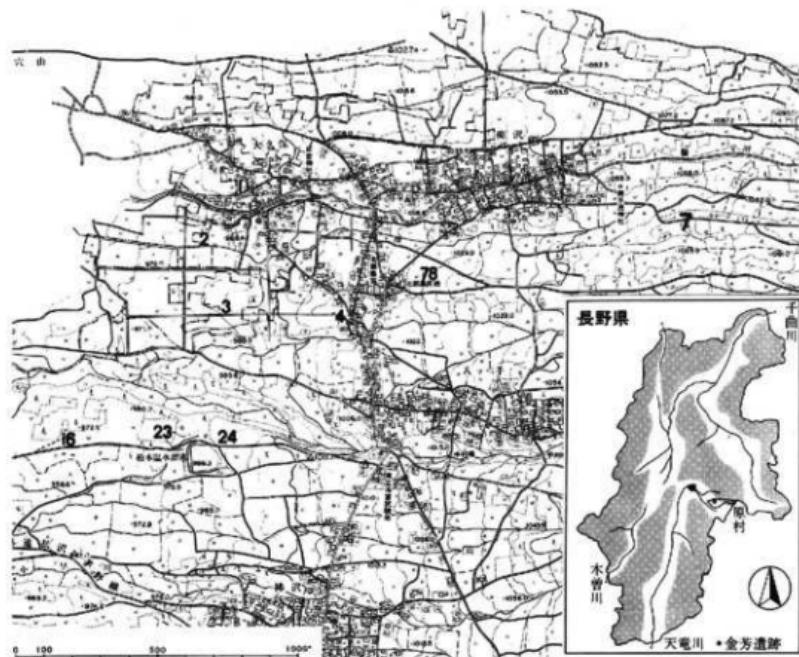
地目は普通畠と山林である。尾根の南側は、開田の際すでに掘り取られ平坦化されているが、付近の地形をみると、なだらかな傾斜地であったことは容易にうかがい知ることができる。この川筋には、湧水があったことから開田は比較的早かったことを聞いている。現在その湧水はわからなくなってしまったが、遺跡立地の条件が良かったようである。北側は、南側に比べ傾斜は急



第1図 原村域の地形断面模式図（赤岳—金芳—宮川ライン）

表1 金芳遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	繩文							備考		
			草	早	前	中	後	晚	古	奈	平	
				生	墳	良	安	世	世			
1	家裏	○		○					○			昭和59年発掘調査
2	大久保前								○			消滅
3	向尾根	○	○		○							昭和54年発掘調査
4	横道下			○					○	○		昭和54年発掘調査
5	柳沢			○	○							
6	前尾根					○						
7	金芳			○					○			昭和63年発掘予定
16	御膳南								○			
23	御膳西		○	○					○			昭和62年発掘調査
24	御膳		○	○	○				○			昭和62年発掘調査
78	弓振日向	○		○	○							昭和60・61年発掘調査



第2図 金芳遺跡の位置と付近の遺跡 (1 : 20,000)

である。尾根幅が狭いことから耕作地を平坦化するため、尾根上は削り取られ、その土は北と南の斜面に埋められている。したがって、尾根上の耕作土はロームが混じる黒褐色土の所が多く、遺跡の保存状態は極めて悪いようである。

南西方約1000mには、昭和61年度に県営は場整備事業弓振地区に伴い発掘調査を実施した弓振日向遺跡が位置している。

IV 遺 跡 の 名 称

本遺跡は、柳沢前尾根遺跡と呼んでいたものを、昭和54年度の八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査から前沢遺跡と呼称し、県営は場整備事業弓振地区に伴う緊急発掘調査を実施した。調査期間中に見学に訪れた人達が、ここ的小字名は「金芳（かなよし）」であることを教えてくれた。

村内に「前沢遺跡」と呼称している遺跡が、柏木地区・中新田地区と本遺跡の3遺跡がある。この3遺跡を区別する上で、遺跡名の前に地区名を付け「柳沢 前沢遺跡」と呼びならわしてきたが、同じ遺跡名であることは、やはり混乱するもとであった。そこで、小字名が明確になったことから、その小字名である「金芳遺跡」と呼ぶことにした。

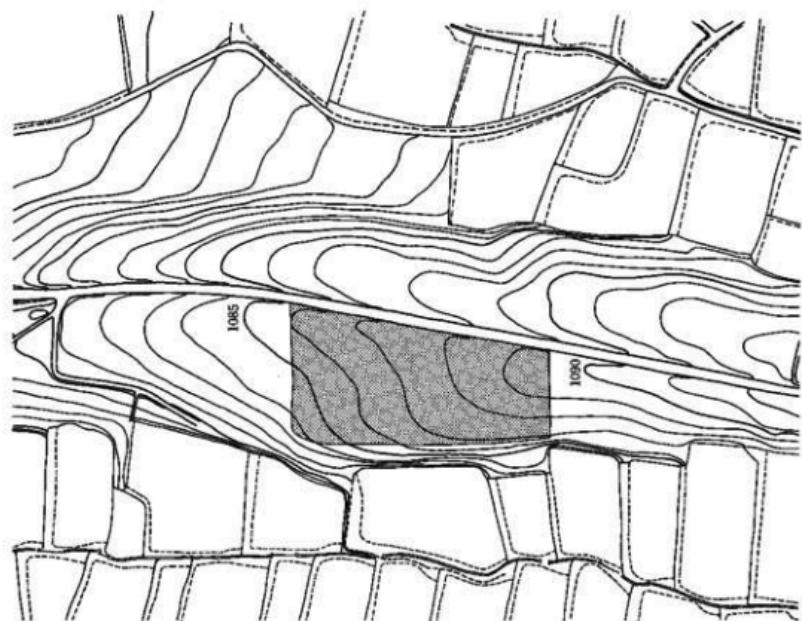
したがって、前沢遺跡緊急発掘調査として実施したが、報告は金芳遺跡とする。

V グリッドの設定と調査方法

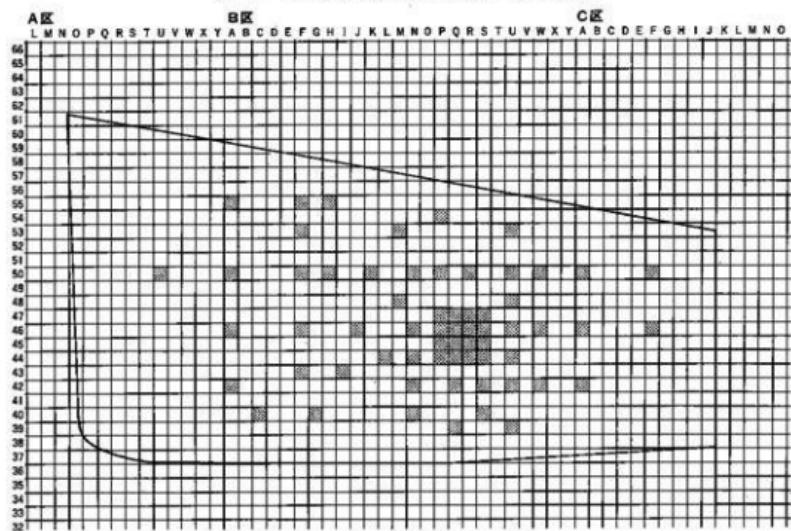
発掘に先立ち、東西南北に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに 2×2 mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振り分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図左端の 2×2 mの発掘グリッドでみると、大地区はA区であり、小地区的東西方向はUラインにあたり、南北方向が50ラインで、それは、「U-50」となる。したがって小地区的前に大地区を表記した「AU-50」となる。

発掘は、原則としてソフトローム層上面まで層位別に行った。



第3図 金芳発掘調査区域図・地形図 (1 : 2,000)



第4図 グリッド配置図 (1 : 800)

VI 土層

第4図のグリッド配置図に示したように、63グリッド252mの平面発掘を層位別に実施した。本遺跡における層序は、ローム層まで擾乱が達しているグリッド、ロームを粉碎して耕作土にしているグリッド、耕作土の直下がローム層となってしまうグリッドもみられたが、基本的には次のとおりである。

第I層 黒褐色土層 煙の耕作土層で22~24cmの厚さである。

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。グリッドによってまちまちで10~26cmを計る。
この土層が認められないグリッドもある。この層が平安時代の遺物包含層である。

第III層 褐色土層 6~12cm。

第IV層 ソフトローム層

VII 発見した遺構と遺物

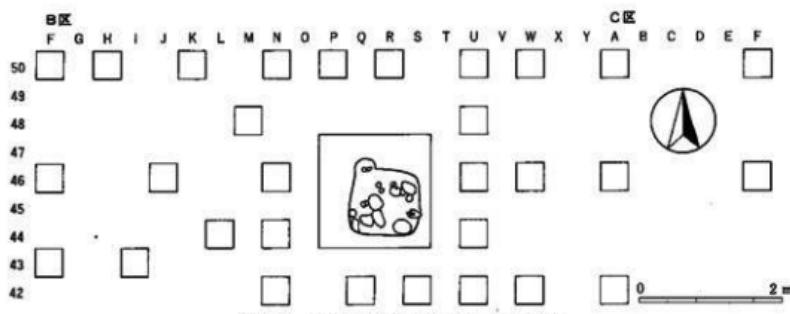
当初は縄文時代中期の遺跡と思い調査したが、平安時代の住居址1軒を発見し、良好な結果を得ることができた。縄文時代は僅かな土器と石器を発見しただけである。それらの資料に若干の説明をしてみたい。

1 平安時代の遺構と遺物

(1) 第1号住居址

調査の経過

BQ-46グリッドで住居址と思われる落ち込みを認め、BC-46グリッドの調査を行いやはり



第5図 金芳遺跡住居址位置図 (1:400)

落ち込みを認めたことにより、住居址の埋没を確信した。手掘りで住居址の検出を進め、第II層の黒色土下半分で、おぼろげながら住居址が確認できる状態となり、カマドの一部と思われる石が東壁際で発見された。しかし、耕作による擾乱が第IV層のソフトロームまで達している箇所もあるため、第IV層のソフトローム層上面まで掘り下げB Q-44-B Q-46、B R-44-B R-46、B S-44-B S-46の6グリッドに跨る平面隅丸方形を呈する竪穴住居址を検出した（第5図）。しかし南壁は耕作の歴が同方向にみられたことから不明確な箇所もあった。北壁西寄りは、径1.43mの穴に切られている。これと同様な穴がBN-39、BU-53、BU-50、BU-46、BU-39の5グリッドで認められた。その穴は列が通り、間隔がほぼ同じ箇所もみられる上に、埋土の状態は新しいことから地主清水義久氏に聞くと、クルミの木を植えた耕作穴であることがわかる。したがって、本調査の対象遺構とは考えなかった。しかし、一見した時、小竪穴と区別できない状態のものもあった。

土層観察ベルトを自然傾斜の東西方向に設定し、住居址の精査を行った。床面までは深く東で38cm、西で30cmを計り、その埋土をI～IIIに細分した。Iは黒色土で基本層序第II層の黒色土である。IIは含ローム黒褐色土、IIIは含ローム・焼土褐色土であるが、焼土は少ない。IIIには写真5でみると、礫の落ち込みがみられた。その礫の出土位置と状況からみて、カマドに使用されていた礫も含まれているものと思われる。以上のようにいわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達がみられた自然埋没による竪穴である。

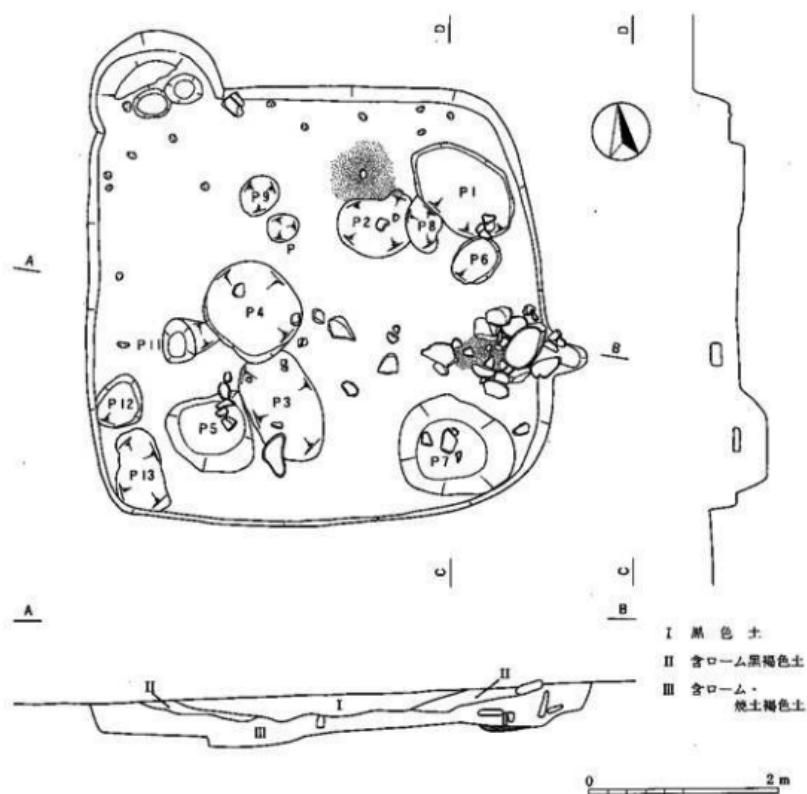
遺物の発見は、カマド周辺から土師器の壊・甕・鋤釜の破片、南西隅の壁際から土師器の壊と灰釉陶器の壊。土層観察ベルト北側の焼土付近から鉄滓とふいごの羽口片が出土した。なお、鉄滓はカマド付近からも出土している。住居中央やや北寄り、焼土南側の床面直上からは有孔磨製石錐1点が出土した。これは、確実に本址に伴うものである。

カマド右側のP 7は、上から含焼土・ローム褐色土、含ローム・礫褐色土、含炭化物・ローム褐色土、含ローム黒色土で埋まっていたが、自然埋没ではなく人為的に埋められたものである。ここでは、土層の違いは埋められた時の違いと考えておきたい。含焼土・ローム褐色土の焼土量は多く、厚さは5～10cmを計る。その上面は床とほぼ同レベルで貼り床状に堅くしまっていた。焼土直上から甕形土器（写真8、第7図6）の出土があった。焼土内からも土師器壊の小破片が出土している。

遺構

北壁は一部耕作穴によって破壊されていたが、平面形は東西4.87m、南北4.66mの隅丸方形を呈する。壁高は北壁の40cmを最高に、東壁38cm、南壁28cm、西壁30cmを計り、良好な状態で遺存していた。床面は壁際はロームのタタキ床で堅く平坦である。その内側はレンズ状に緩やかに産む上に凹凸が著しく軟弱である。

ピットは大小あわせて13個検出した。このうち柱穴と思われるものは深さ30.5cmのP 11の1本だけである。カマド右にある深さ27.5cmのP 7は、その位置から貯蔵穴と考えられるが、調査の



第6図 第1号住居址実測図 (1 : 60)

経過で記載したように、住居廃絶時には貼り床がされていた。P 1は10cm、P 2は4.5cm、P 3は15cm、P 4は11cm、P 5は21cm、P 6は6cm、P 8は10cm、P 9は7cm、P10は6cm、P12は9cm、P13は10cmといずれも堀り込みは浅い。切り合い関係を生じている部分もあるし、P 1・P 3・P 5・P 12はロームの貼り床がされていた。貼り床の下はP 1とP 12が褐色土、P 3は含ローム・焼土褐色土、P 5は含ローム黒色土であった。

カマドは東壁中央より南に片寄った位置にある。石組粘土カマドで、平石を立て袖石とし（写真9～11）黄褐色土に覆われていた。天井石も残りその遺存状態は良い。煙突部には錫蓋の破片が使われていた。規模は、焚口部から煙突部先端までが150cm、焚口幅は100cmを計る。カマド内の焼土は厚さは6cm程である。

住居中央やや北寄りの地床炉は、70×60cmの範囲で焼土の厚さは12cmを計り、カマドよりしつかり焼けている。鍛冶用の地床炉であろう。

遺 物

出土遺物は埋土からは少なく、ほとんどが床面ないしは床面上であり、土器・石器・ふいごの羽口・鉄滓がある。

土器は土師器と灰釉陶器があり、供膳形態では土師器の環形土器第7図1～5、折戸53号窯期の灰釉陶器の碗形土器10～13がある。1は破片から器形を復原したもので約6分の1が残存している。2は約3分の2が残存し、内面には赤色顔料の付着がみられる。1・2とも焼成は軟質である。3は完形の高台壺で、外面・内面ともロクロナデされている。高台の高さは全器形の3分の1を計る特異な器形で、焼成は比較的軟質である。類例は原村・大石遺跡8号住居址、茅野市・頭殿沢遺跡2号住居址にみられる。4は高台壺の底部破片で、やや厚手となるうえに堅い。5は内面黒色研磨された小破片であり、外面に墨書きされているが残存部は少なく判読できない。このほかに図示していないが、底部に糸切痕のみられるもの、内面黒色研磨された小破片もある。10は約3分の2、11は約2分の1が残存している。12は小破片から器形を復原したものであり、13は底部破片である。このほかに図示していない小破片がある。

煮沸形態は土師器の壺形土器6・7と、銚釜8・9がある。6は約3分の2が残存し、胎土・焼成とも良い。7は底部破片で木の葉底である。8・9は破片から器形を復原したもので、8は煙道部に使用されていたものである。やはり図示していないが小破片がある。

ふいごの羽口14は、残片ともいえる小破片でもろくなっている。先端部の器壁は溶融している上に、溶解鉄（スラグ）が付着している。鉄滓（写真12）は、21点出土したが、その重さは重いものが180g、軽いものは3gとまちまちであるが、合せて638gを計る。

粘板岩（スレート）製の有孔磨製石鎌15は、先端部と右脚部を僅かに欠損するが、現長5cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmを計る大きなものである。整形は比較的粗雑で、鎌を有するが確りしたものではない。穿孔は、片面穿孔した後に裏面の孔口を整えたものであるが、当初は両面穿孔を試みたようで、裏面に回転磨滅による小凹穴がみられる。

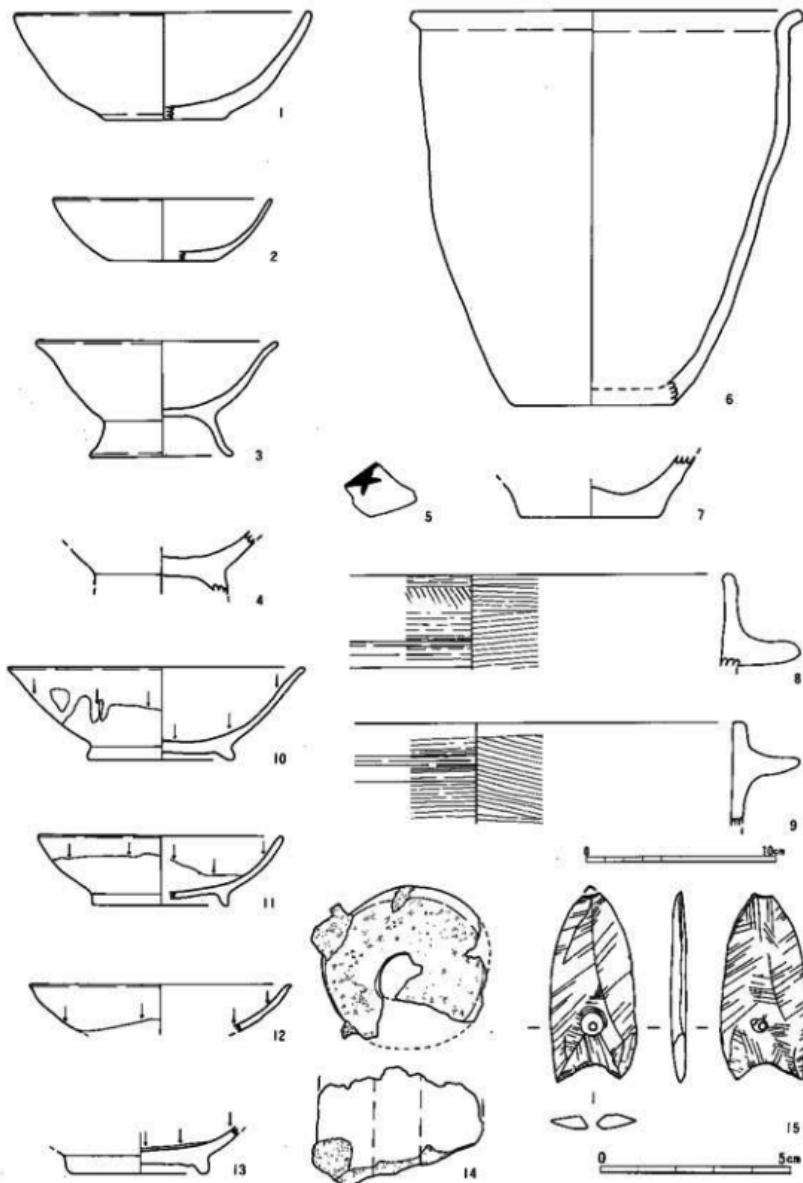
(2) 遺構外出土の遺物

土器・砥石・鉄滓がある。

土師器の環形土器第8図5は、破片から器形を復原したもので約6分の1が残存している。BK-50グリッド出土。このほかにも、図示していない土師器の壺・壺形土器と灰釉陶器の碗形土器の小破片がある。それらは、1号住居址と同じ平安時代後期の12世紀であろう。

砥石6は、帰属時期を明確にすることはできないが、BK-50グリッドで土師器・灰釉陶器の破片などと同じ層から出土したことから、ここでは、平安時代後期と考えておきたい。

鉄滓1点は図示していないが、B地区で表面採集したものである。



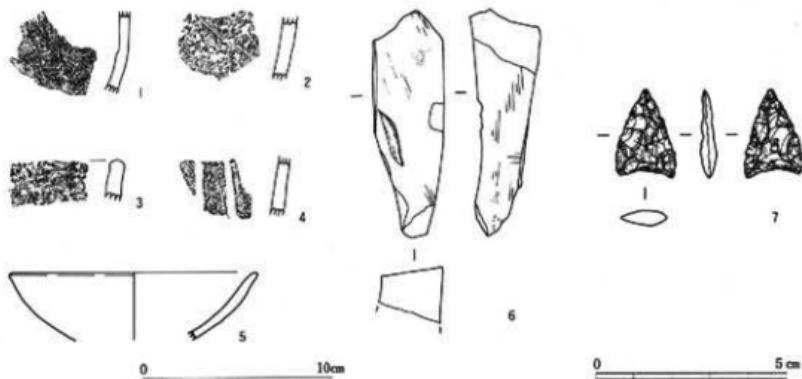
第7図 第1号住居址土器・石器・羽口実測図 (1~14 1:3、15 2:3)

2 縄文時代の遺物

発見した遺物は少ないが土器と石器がある。

土器は、発掘資料2点と表面採集した3点があり、小破片で器形の判別できるものはない。石器は、石鏃1点だけである。

土器破片2点と石鏃はBM-53グリッドから出土しただけで、遺構を検出するまでに至っていない。



第8図 遺構外土器・石器実測図 (1~5 1:3, 6~7 2:3)

(1) 土 器

第8図1は、半截竹管によって引かれたと思われる平行沈線が、斜方向に施された胴部破片で、器壁の内・外とも炭化物の付着がみられる。胎土・焼成とも普通である。2は、昭和62年12月に実施した踏査の際に、表面採集した素文の胸部破片で、胎土・焼成とも良い。3は、A地区で表面採集した素文の口縁部破片で、図示していないが同個体と思われる破片1点がある。胎土・焼成は良く堅い。これらは明確な時期判別はできないが、その胎土・成形および焼成からみて中期後葉の曾利式であろう。4は、懸垂沈線文と縄文が施された胴部破片で、胎土・焼成は良い。中期後葉曾利IIないしIII式の加曾利E系のものである。

(2) 石 器

チャート製の石鏃7は、当地方に一般的にみられるものである。

VIII まとめ

本調査では、縄文時代中期の遺跡とばかり考えていたのに、平安時代の住居址1軒を発見した。当地方におけるこの時期の遺跡立地は、阿久遺跡や居沢尾根遺跡等で明らかにされてきているように、浅い沢に面した緩やかな南斜面を占地としている。しかし、本遺跡では南斜面は、すでに水田造成時に掘り取られ、平坦化されている。したがって、当時、住居址が1軒であったのか、それとも水田造成時に破壊されているのかを明確にすることはできないが、発見住居址は小鍛冶を伴う家であり、当地方における小鍛冶址は、集落跡の中の1軒であり、本址がここに1軒で存在していたとは考えにくく、水田造成の際掘り取られてしまったと考えた方が良いようである。

本址は鍛冶用地床炉、ふいごの羽口と鉄滓の発見から、小鍛冶工房と考えた。中央やや北寄りの鍛冶用地床炉は床面と同レベルで、岡谷市・洩矢遺跡3号住居址・船靈社遺跡7号住居址のように掘り窪められていない。鍛冶炉の構造に若干の違いがあったのかもしれない。

11個検出した掘り込みの浅いピットは、ふいごの羽口と鉄滓が出土した茅野市・判ノ木西遺跡12号住居址の「床下土壤」と類似する。小鍛冶施設の一つと考えられるが、的確な決め手となる遺物の発見はなかったが、DK-50グリッドで砥石が出土していること、数多い鐵滓の発見は本遺跡での鐵器使用を示す資料となろう。

注目される資料の一つとして、1点ではあったが有孔磨製石鎌がある。床面からの出土で、確實に平安時代に帰属するもので、磨製石鎌イコール弥生時代と考えがちであったが、平安時代の住居址に伴っている事実は、磨製石鎌研究上の好資料になるものと思われる。桐原健氏は、岡谷市海戸遺跡出土の磨製石鎌に注目し、古式土師器の住居址に伴出することを述べているし、伊那市・御殿場遺跡2号住居址は、平安時代中頃の家で、有孔磨製石鎌が出土している。「土師時代では非常に珍品である。磨製石鎌が竈の前にある青色粘土の近くから出土した。弥生時代とは石質が違い、長さ6.5cm幅3cmの大型に1.2mmの薄手で形は整って美しい鎌として実用できない遺物である。」と述べている。

本址は、小鍛冶工房でありながら有孔磨製石鎌の発見は、意味深いものがあり、御殿場遺跡でも述べているように、実用品というよりも特殊なものと考えた方がよいのかもしれない。

鍛冶工房として、その性格を的確にできる金床石の発見はなかったが、鍛冶炉、ふいごの羽口・鉄滓という状況証拠はそろい、小鍛冶址であることは間違いないであろう。当時の鍛冶址構造については、まだ充分資料が集積されていないこともあり、本址の発見は、鍛冶址研究に良好な資料を提供したといえよう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

引用・参考文献

1969. 01 伊那市教育委員会「伊那市御殿場遺跡緊急発掘調査概報」(『伊那路』11-1)
1967. 03 桐原健「岡谷市海戸遺跡出土の磨製石鎌」(『信濃考古』17・18)
1972. 03 長野県教育委員会「昭和46年度 農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
1976. 03 伴信夫・土屋積ほか「大石遺跡」「昭和50年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その1、富士見町その2」
1979. 03 伴信夫・白田武正ほか「殿頭沢遺跡」「昭和51年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その2」
1981. 03 小林秀夫・白田武正ほか「判ノ木山西遺跡」「昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3」
1980. 03 長野県教育委員会「昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書」
1980. 03 笹沢 浩ほか「浅矢遺跡」「昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 岡谷市その4」
1980. 03 樋口昇一ほか「船塙社遺跡」「昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 岡谷市その4」
1982. 04 岡田正彦「平安時代の鉄製用具と小銀冶遺構小考 特に中南信地方住居址出土遺物を中心として」(『中部高地の考古学』II)
1985. 07 原村役場「原村誌 上巻」
1988. 01 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報4 柳沢前沢遺跡踏査報告書 昭和63年度県営は場整備事業弓張地区内における表面探査」

発掘調査団名簿

団長 平林 太尾 (原村教育委員会教育長)
調査担当者 平出 一治 (原村教育委員会)
調査員 伊藤 証 (原村教育委員会)
調査補助員 平林とし美
調査参加者 菊池 利光 小林 静子 藤原智恵子 宮坂とし子 真道 ふき (順不同)

事務局 原村教育委員会事務局 行田 竹輝 (教育次長)
武田伊都子 (庶務係長) 大口美代子 (主任) 佐貫 正憲

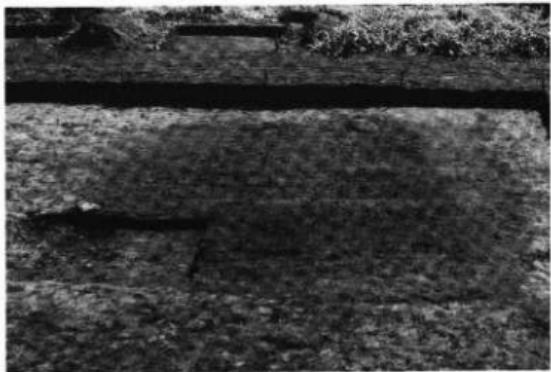
1. 遺跡遠景(南東から)

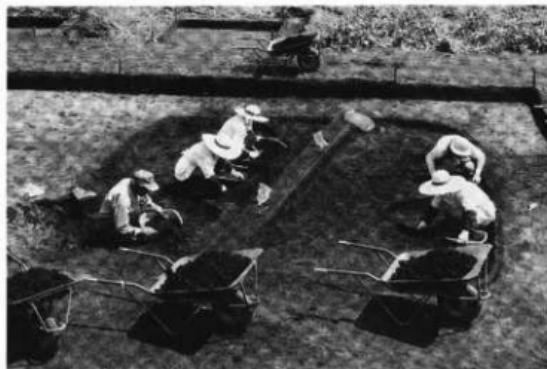


2. 発掘風景

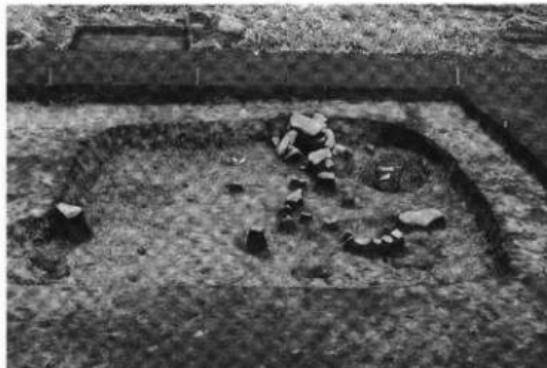


3. 1号住居址検出状態

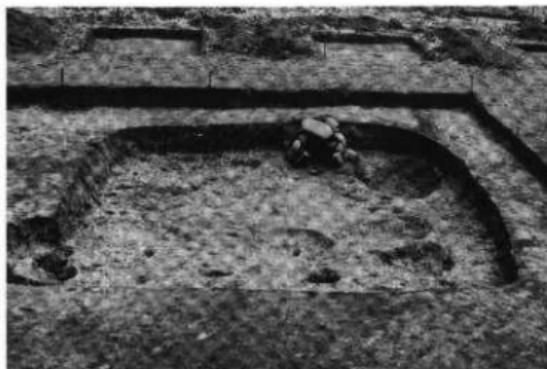




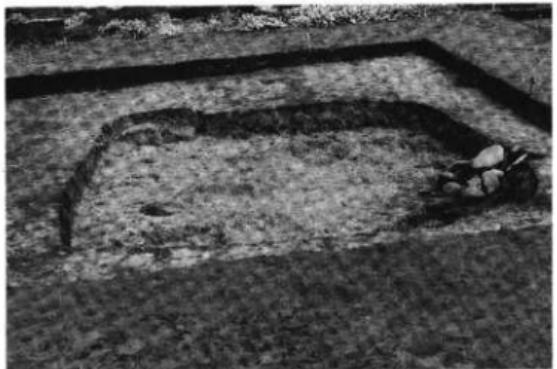
4. 発掘風景



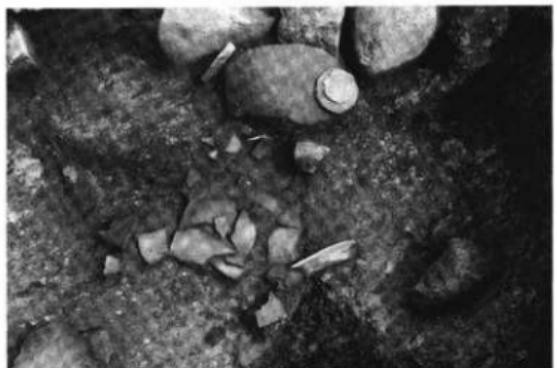
5. 掘出土状態



6. 住居址全景(西から)



7. 住居址全景(南から)



8. 遺物出土状態



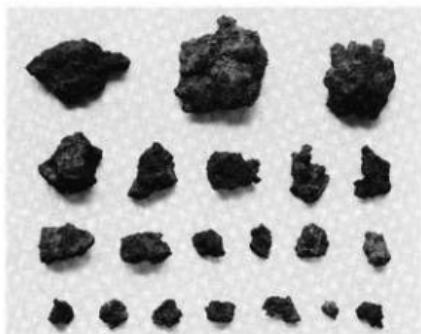
9. カマ下全景 ①



10. カマド全景 ②



11. カマド全景 ③



12. 1号住居址出土鉄滓

原村の埋蔵文化財14

金 芳 遺 跡

昭和63年度 県営ほ場整備事業弓
張地区に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成元年3月15日

発 行 原村教育委員会

長野県諏訪郡原村

印刷所 ミウラ企画書籍

